

福島事故のあと放射線の不安はどのように変化したか

木下富雄

(公財)国際高等研究所フェロー・京都大学名誉教授

(1) 放射線はなぜ怖がられるのか

放射線に対する不安の原因は、知識不足、公教育の欠如、放射線の特性に起因するリスク認知のバイアス(目に見えない、晚発性効果など)、原爆のトラウマなど。

(2) 放射線への不安は昔から

放射線の不安は福島事故を境に増えたわけでは無い。昔から不安感は強い。また日本独自のものでもない。世界のどの国も放射線への不安は高い(チェルノブイリも原因)。

(3) 福島事故のあと放射線不安はどのように変化したか

福島事故のあと放射線の線量はサイトを中心に増大した。ただ原発周辺の線量は高いが距離が離れると共に線量は低くなり、公衆全体としての健康リスクは高くなかった(環境省)。しかし主観的な放射線不安は増大した。

不安は一般的にいえば、時間経過と共に心理学でいう忘却曲線' (把持曲線) にしたがって減衰するが、その様相は研究者のデータによって少し異なる。三浦ほかによると時系列変化はさほど見られないというが、川上によるとかなりの減衰が見られる。また北田によると放射線全体への不安は減少するが晚発効果への不安は保たれるという。

このような違いは調査時点の差だけではなく、調査対象、サンプル抽出法、調査手法、調査項目などの違いで発生するからどのデータが正しいとはすぐに回答できない。しかし全体としてパニックを発生させるような強い不安は発生しなかったと言えるだろう。また数値データではないが、地域や行政からの説明会依頼が事故発生当初は極めて多かったのに、時間経過と共に急速に少なくなった。説明会で發せられる聴衆からの質問内容も、当初の放射線リスクに関するものから生活相談的なものに大きく変身した。

(4) 派生的な変化

放射線への不安をマクロ的に説明すると以上のとくだが、ミクロ的にはいろいろな様相の変化が見られる。例えばどうしても不安が捨て去れない少数者が残存し、彼らは説明会の後で質問をしても、周囲の多数者から「お前はまだそんなことを気にするのか」と嗤われて孤立すると嘆く。つまり被災者の反応が多様化している。

また興味深いのは中谷内らの研究で、彼らによると東北の地震・津波・原発事故の後ではそれ以外の対象に対するリスク評価が減少したという。不安の総量は一定なのか。